

平成28年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	外国語科目（日本語）
-----	----------	-----	------------

文章を読んで、以下の設問に答えよ。

道を歩いていて突然、知らない人から「肩が触れた」あるいは「ガンをつけた」と言いがかりをつけられる—そういう理不尽な出来事が、ときどき新聞やテレビを賑わせる。とんでもなく粗暴な人間か、よほど機嫌でも悪かったのだろうか。だが、それにしても、わりとよく耳にする事例ではある。A なぜだろう。

もし自分が遭遇してしまったら……、と想像してみよう。そんな理不尽な、と思う隣にもうひとりの自分がいて、「あ、しまった……」と感じてはいないだろうか？「しまった」と思うのは、① 図らずも何かをしてしまったという直観の表れである。「肩が触れた」なら文字どおりの身体接触、「ガンをつけた」のは（そちらを見たということだから）視覚による間接的な接触であり、つまりは、相手の身体的「なわばり」に自分は触れてしまったのではないか、という自省が「しまった」という思いになる。だとすると、ここには、相手のなわばりに触れることにかんする、人類的な「タブー」の問題がかかわっていることになる。

満員電車が不快であることの理由も、ここから説明することができる。満員電車の中では、人は身体的ななわばり（パーソナル・スペース）を確保することができず、身体的な自由もきかない。見知らぬ人どうし、互いに互いのなわばりを侵し合った状態のまま運ばれてゆくことは苦痛であり、そのような状況では、ちょっとした身体の触れ方ひとつで簡単に諍いが起こることを人びとは知っている。満員電車とは、そもそも基本的なタブーを犯すことが避けられないような状況なのである。だから、そこでは皆がすこしずつ緊張している。何の媒介もない近すぎるナマの人間関係は、危険が大きく、人に緊張を ア強いる。

ところが一方、互いのなわばりに踏み込み合うことが、不快どころか大きな幸福感をもたらすような人間関係も存在する。恋人同士という関係はその典型である。恋人たちは、身体を寄せ合い、触れ合い、また互いを見つめ合い、口づけをする。互いのなわばりが境界を失ってひとつに融合しているこの状態が、幸福なのである。もちろん、こうした人間関係は、いくつもの条件が満たされていなければ成立しない—満員電車の中で見知らぬ人に同じことをしたら、それは「痴漢」と呼ばれる犯罪行為になってしまう。しかし人は、自分や相手が傷つくリスクを承知のうえで（たとえば“ふる/ふられる”）、こうした関係を求めようとする。

ここに人間関係と“なわばり”のややこしい関係を見てとることができるだろう。人は自分のなわばりを確保しておきたいと思ひ、他者から踏み込まれたくないと思ひ。ところが同時に、人は、他者と通じ合い、互いに互いを受容し、ふたりでひとつのなわばりを共有するような関係を持つことを喜びとする。このふたつの欲求は基本的に相容れず、一方を最大限に満たせば、他方は断念するしかできないような関係にある。たとえば、「ひきこもり」と呼ばれる状態は、前者だけを守り、後者を放棄せざるを得なくなった状態のことと見ることができる。他者を傷つけもせず他者から傷つけられることもないかわりに、他者と交わる喜びも訪れない。反対に、時に「パシリ」などと呼ばれ悲劇的な結末を生んだりするケースは、他者との交わりばかりが肥大して、ついには、他者が踏み込んでこない“自己”を保つ余地がなくなってしまった場合である。

さらにいえば、この欲求は自分だけのものではない。対面する相手もまた、同じふたつの欲求を持っている。欲求と欲求を直接ぶつけ合っても、生じるのは争いだけである。ここに、最も広い意味での“交渉”が必要となる素地がある。「ポライトネス」とは、② さしあたり、この“交渉”に欠かすことのできない対人的配慮のことだと言ってよい。何ものにも媒介されないナマの人間関係は、見知らぬ他者との間で持つには近すぎて危険である。ナマの人間関係を回避するために他者を遠ざけることはできるけれども、遠すぎれば今度はたんに疎遠となって人間関係自体が成り立たない。人間関係のそうした不安定を軽減するには、対人関係を調節する媒体が必要なのである。よく知られているように身振りや表情は非言語的な次元で一定の媒介的機能を果たしている。ことばを持った人間は、同様の働きを言語にも見いだした。そして言語は、人を“近づけつつ遠ざける”という一見奇妙な働きをしながら、対人関係を適度な距離に調節してくれる最大の媒介者となった。「ポライトネス」とは、言語のもつばら対人関係の確立や維持・調節にかかわる働きのことである。

たとえば、都会の街角で見知らぬ中年の男性に話しかけなければならぬでしょう。（あなたは20代だとして）もし、いきなり「おじさん」と言ったのでは、相手はからかわれたかと思うだろう。「あなた」も、何か説教でもする気かと、相手は身構えてしまうかもしれない。どちらも具合が悪い。そこで人は、「あの、ちょっと」とか「ちょっと、すみません」のような、直接相手を指す言葉が含まれていない、間接的な呼びかけの形を選ぶことになる。つまり、近すぎる呼称は不意の身体接触と同様の効果を持ってしまい、それを避けるために人は、呼称を間接化することで“なるべく呼ばないようにして呼ぶ”のである。反対に、仲良くなった友だちに「あの、ちょっと」と呼びかける人は普通でない。親しい関係に、遠すぎる呼称は似つかわしくない。もしそう呼んだら、ふたりの間に突然、③ “他人行儀”が持ち込まれるような、普通でない何かが起こっていると解釈されるだろう。

たかが“人を呼ぶこと”と考えてはいけぬ。ここには、「ポライトネス」を考えるための要件がそろうている。まず、ポライトネスは、対人関係の基本的な構え—具体的には相手と自分の〈距離〉の遠近—を伝達する手段となる。それが“適正”であると感じられれば、そのこと自体意

識させられないかもしれないが、何らかの点で逸脱があれば、相手は敏感にそこに込められた“含み”を感じ取る。さらに、そのようにして表され、伝達される距離感、相手との現実の人間関係に対するチューニングだけでなく、ありたいと話し手が思ふ関係へのシフトを促しもする。

B 呼称と同様に、敬語はいうまでもなく、指示詞「こ／そ／あ」の選択や、終助詞「か／よ／ね」の使用といったことにも、ポライトネスの問題がかかわってくる。

(滝浦真人『ポライトネス入門』より。設問の都合上、一部の表記を改変。)

問1 二重下線ア「強いる」、イ「他人行儀」の読みをそれぞれひらがなで記しなさい。

問2 波線①「囚らずも」、②「さしあたり」と同じ意味の語をそれぞれ日本語で記しなさい。

問3 下線A「なぜだろう」について筆者はその理由をどのように説明しているか。日本語で述べなさい。

問4 下線Bについて、筆者は「ポライトネス」に関する日本語の事象として「呼称」「敬語」「指示詞」「終助詞」の例を挙げている。あなた自身の母語では「ポライトネス」にかかわるどのような事象が見られるだろうか。自分の母語を明らかにしたうえで具体的に説明しなさい。